

与謝野晶子 訳

# 源氏物語

桐壺卷



一冊堂青空文庫



源氏物語

桐壺

紫式部

與謝野晶子訳

紫のかがやく花と日の光思ひあはざる

ことわりもなし

(晶子)

どの天皇様の御代みよであつたか、女御にょごとか更衣こういとかいわれる後宮しうきゆうがおおぜいた中に、  
最上の貴族出身ではないが深い御愛寵あいちようを得ている人があつた。最初から自分こそはとい  
う自信と、親兄弟の勢力に恃たのむ所があつて宮中にはいった女御たちからは失敬な女とし  
てねたまれた。その人と同等、もしくはそれより地位の低い更衣たちはまして嫉妬しつとの焰ほのお  
を燃やさないわけもなかった。夜の御殿おとどの宿直所とのいじころから退さがる朝、続いてその人ばかりが召  
される夜、目に見耳に聞いて口惜くちおしがらせた恨みのせいもあつたかからだが弱くなつ  
て、心細くなつた更衣は多く実家へ下がつていがちということになると、いよいよ帝みかどは

この人にばかり心をお引かれになるといふ御様子で、人が何と批評をしようともそれに御遠慮などというものがおできにならない。御聖徳を伝える歴史の上にも暗い影の一所残るようなことにもなりかねない状態になった。高官たちも殿上役人たちも困って、御覚醒かくせいになるのを期しながら、当分は見ぬ顔をしていたいという態度をとるほどの御寵愛ちようあいぶりであつた。唐の国でもこの種類の寵姫ちようき、楊家の女じよの出現によつて乱が醸かもされたなどと蔭かげではいわれる。今やこの女性が天下の煩わづわいだとされるに至つた。馬嵬ばかいの駅がいつ再現されるかもしれぬ。その人にとつては堪えがたいような苦しい雰囲氣ふんいきの中でも、ただ深い御愛情だけをたよりにして暮らしていた。父の大納言だいなごんはもう故人であつた。母の未亡人が生まれのよい見識のある女で、わが娘を現代に勢力のある派手はでな家の娘たちにひけをとらせないよき保護者たりえた。それでも大官の後援者を持たぬ更衣は、何かの場合にいつも心細い思いをするようだった。

前生ぜんしやうの縁が深かつたか、またもないような美しい皇子までがこの人からお生まれになつた。寵姫を母とした御子みこを早く御覧になりたい思召おぼしめしから、正規の日数が立つとすぐに更衣母子おやこを宮中へお招きになつた。小皇子しょうおうじはいかなる美なるものよりも美しいお顔をしておいでになつた。帝の第一皇子は右大臣の娘の女御からお生まれになつて、重い

外戚が背景がいせきになっていて、疑いもない未来の皇太子として世の人は尊敬をささげているが、第二の皇子の美貌びぼうにならぶことがおできにならぬため、それは皇家おうけの長子として大事にあそばされ、これは御自身の愛子あいしとして非常に大事がっついておいでになった。更衣は初めから普通の朝廷の女官として奉仕するほどの軽い身分ではなかった。ただお愛しになるあまりに、その人自身は最高の貴女きじよと言つてよいほどのりっぱな女ではあったが、始終おそばへお置きになろうとして、殿上で音楽その他のお催し事をあそばす際には、だれよりもまず先にこの人を常の御殿へお呼びになり、またある時はお引き留めになつて更衣が夜の御殿から朝の退出ができずそのまま昼も侍しているようなことになつたりして、やや軽いふうにも見られたのが、皇子のお生まれになつて以後目に立つて重々しくお扱いになつたから、東宮にもどうかすればこの皇子をお立てになるかもしれないと、第一の皇子の御生母の女御は疑いを持つていた。この人は帝の最もお若い時に入内じゅだいした最初の女御であつた。この女御がする批難と恨み言だけは無関心にしておいでになれなかつた。この女御へ濟まないという氣も十分に持つておいでになつた。帝の深い愛を信じながらも、悪く言う者と、何かの欠点を捜し出そうとする者ばかりの宮中に、病身な、そして無力な家を背景としている心細い更衣は、愛されれば愛されるほど苦しみが

ふえるふうであつた。

住んでいる御殿は御所の中の東北の隅のような桐壺であつた。幾つかの女御や更衣たちの御殿の廊を通い路にして帝がしばしばそこへおいでになり、宿直をする更衣が上がり下がりして行く桐壺であつたから、始終ながめていねばならぬ御殿の住人たちの恨みが量んでいくのも道理と言わねばならない。召されることがあまり続くころは、打ち橋とか通い廊下のある戸口とかに意地の悪い仕掛けがされて、送り迎えをする女房たちの着物の裾が一度でいたんでしまうようなことがあつたりする。またある時はどうしてもそこを通らねばならぬ廊下の戸に錠がさされてあつたり、そこが通れねばこちらを行くはずの御殿の人どうしが言い合せて、桐壺の更衣の通り路をなくして辱しめるようなことなどもしばしばあつた。数え切れぬほどの苦しみを受けて、更衣が心をめいらせているのを御覧になると帝はいつそう憐れを多くお加えになつて、清涼殿に続いた後涼殿に住んでいた更衣をほかへお移しになつて桐壺の更衣へ休息室としてお与えになつた。移された人の恨みはどの後宮よりもまた深くなつた。

第二の皇子が三歳におなりになつた時に袴着の式が行なわれた。前にあつた第一の皇子のその式に劣らぬような派手な準備の費用が宮廷から支出された。それにつけても世

間はいろいろに批評をしたが、成長されるこの皇子の美貌びぼうと聡明そうめいさが類のないものであったから、だれも皇子を悪く思うことはできなかった。有識者はこの天才的な美しい小皇子を見て、こんな人も人間世界に生まれてくるものかと皆驚いていた。その年の夏のことである。御息所みやすびへしろ——皇子女おうじじよの生母になった更衣はこう呼ばれるのである——はちよつとした病氣になって、実家へさがろうとしたが帝はお許しにならなかった。どこからだが悪いということはこの人の常のことになっていたから、帝はそれほどお驚きにならずに、

「もうしばらく御所で養生をしてみてもからにするがよい」

と言っておいでになるうちにしだいに悪くなって、そうなってからほんの五、六日のうちに病は重体になった。母の未亡人は泣く泣くお暇を願って帰宅させることにした。こんな場合にはまたどんな呪詛じゆそが行なわれるかもしれない、皇子にまで禍わざわいを及ぼしてはとの心づかいから、皇子だけを宮中にとどめて、目だたぬように御息所だけが退出するのであった。この上留めることは不可能であると帝は思召して、更衣が出かけて行くところを見送ることのできぬ御尊貴の御身の物足りなさを堪えがたく悲しんでおいでになった。

はなやかな顔だちの美人が非常に瘦<sup>や</sup>せてしまつて、心の中には帝とお別れして行く無限の悲しみがあつたが口へは何も出して言うことのできないのがこの人の性質である。あるかないかに弱っているのを御覧になると帝は過去も未来も真暗<sup>まっくら</sup>になつた気があそばすのであつた。泣く泣くいろいろな頼もしい将来の約束をあそばされても更衣はお返辞もできないのである。目つきもよほどだるそうで、平生からなよなよとした人がいつそう弱々しいふうになつて寝ているのであつたから、これはどうなることであろうという不安が大御心<sup>おおみこころ</sup>を襲うた。更衣が宮中から輦車<sup>れんしゃ</sup>で出てよい御許可<sup>ごきょ</sup>の宣旨<sup>せんじ</sup>を役人へお下しになつたりあそばされても、また病室へお帰りになると今行くということをお許しにならない。

「死の旅にも同時に出るのがわれわれ二人であるとおなたも約束したのだから、私を置いて家<sup>うち</sup>へ行つてしまうことはできないはずだ」

と、帝がお言いになると、そのお心持ちのよくわかる女も、非常に悲しそうに顔を  
見て、

「限りとて別るる道の悲しきにいかまほしきは命なりけり



死がそれほど私に迫って来ておりませんでしたら」

これだけのことを息も絶え絶えに言つて、なお帝にお言いたいことがありそうであるが、まったく気力はなくなつてしまつた。死ぬのであつたらこのまま自分のそばで死なせたいと帝は思召おぼしめしたが、今日から始めるはずの祈禱きとうも高僧たちが承つていて、それもぜひ今夜から始めねばなりませんというようなことも申し上げて方々から更衣の退出を促すので、別れがたく思召しながらお歸しになつた。

帝はお胸が悲しみでいっぱいになつてお眠りになることが困難であつた。歸つた更衣の家へお出しになる尋ねの使いはすぐ歸つて来るはずであるが、それすら返辞を聞くことが待ち遠しいであろうと仰せられた帝であるのに、お使いは、

「夜半過ぎにお卒去かくれになりました」

と言つて、故大納言家の人たちの泣き騒いでいるのを見ると力が落ちてそのまま御所へ歸つて来た。

更衣の死をお聞きになつた帝のお悲しみは非常で、そのまま引きこもつておいでになつた。その中でも忘れがたみの皇子はそばへ置いておきたく思召したが、母の忌服中きふくの皇子が、穢けがれのやかましい宮中においでになる例などはないので、更衣の実家へ退出

されることになった。皇子はどんな大事があつたともお知りにならず、侍女たちが泣き騒ぎ、帝のお顔にも涙が流れてばかりいるのだけを不思議に思いになるふうであつた。父子の別れというようなことはなんでもない場合でも悲しいものであるから、この時の帝のお心持ちほどお気の毒なものではなかつた。

どんなに惜しい人でも遺骸<sup>いがい</sup>は遺骸として扱われねばならぬ、葬儀が行なわれることになつて、母の未亡人は遺骸と同時に火葬の煙になりたいと泣きこがれていた。そして葬送の女房の車にしていって望んでいっしょに乗つて愛宕<sup>おたぎ</sup>の野にいかめしく設けられた式場へ着いた時の未亡人の心はどんなに悲しかったであらう。

「死んだ人を見ながら、やはり生きている人のように思われてならない私の迷いをさますために行く必要があります」

と賢そうに言っていたが、車から落ちてしまひそうに泣くので、こんなことになるのを恐れていたと女房たちは思った。

宮中からお使いが葬場へ来た。更衣に三位<sup>さんみ</sup>を贈られたのである。勅使がその宣命<sup>せんみょう</sup>を読んだ時ほど未亡人にとって悲しいことはなかつた。三位は女御<sup>にょご</sup>に相当する位階である。生きていた日に女御とも言わせなかつたことが帝<sup>みかど</sup>には残り多く思召されて贈位を賜わつ

たのである。こんなことでも後宮のある人々は反感を持った。同情のある人は故人の美しさ、性格のなだらかさなどで憎むことのできなかった人であると、今になって桐壺の更衣こういの真価を思い出していた。あまりにひどい御殊寵しゅちゆうぶりであったからその当時は嫉妬しどを感じたのであるとそれらの人は以前のことを思っていた。優しい同情深い女性であつたのを、帝付きの女官たちは皆恋しがっていた。「なくてぞ人は恋しかりける」とはこうした場合のことであろうと見えた。時は人の悲しみにかかわりもなく過ぎて七日の仏事が次々に行なわれる、そのたびに帝からはお弔いの品々が下された。

愛人の死んだのちの日がたつていくにしたがつてどうしようもない寂しさばかりを帝はお覚えになるのであつて、女御、更衣を宿直とくいに召されることも絶えてしまった。ただ涙の中の御朝夕であつて、拝見する人までがしめつぽい心になる秋であつた。

「死んでからまでも人の気を悪くさせる御寵愛ごきでんぶりね」

などと言って、右大臣の娘の弘徽殿こうきでんの女御にょぎなどは今さえも嫉妬を捨てなかつた。帝は一の皇子を御覧になつても更衣の忘れがたみの皇子の恋しさばかりをお覚えになつて、親しい女官や、御自身のお乳母めのとなどをその家へおつかわしになつて若宮の様子を報告させておいでになつた。

野分のわきふうに風が出て肌寒はださむの覚えられる日の夕方に、平生よりもいつそう故人が思われ

れになって、鞍負ゆげいの命婦みょうふという人を使いとしてお出しになった。夕月夜の美しい時刻に命婦を出かけさせて、そのまま深い物思いをしておいでになった。以前にこうした月夜は音楽の遊びが行なわれて、更衣はその一人に加わつてすぐれた音楽者の素質を見せた。またそんな夜に詠む歌なども平凡ではなかった。彼女の幻は帝のお目に立ち添つて少しも消えない。しかしながらどんなに濃い幻でも瞬間の現実の価値はないのである。

命婦は故大納言家だいなごんに着いて車が門から中へ引き入れられた刹那せつなからもう言いようのない寂しさが味わわれた。未亡人の家であるが、一人娘のために住居すまいの外見などにもみすぼらしさがないようにと、りっぱな体裁を保つて暮らしたのであるが、子を失った女主人おんなあるじの無明むみょうの日が続くようになってからは、しばらくのうちに庭の雑草が行儀悪く高くなった。またこのごろの野分の風でいつそう邸内が荒れた気するのであったが、月光だけは伸びた草にもさわらずさし込んだその南向きの座敷に命婦を招じて出て来た女主人はすぐにもものが言えないほどまたも悲しみに胸をいっぱいにしていた。

「娘を死なせました母親がよくも生きていられたものというように、運命がただ恨めしゅうございますのに、こうしたお使いが荒ら屋あばへおいでくださるとまたいつそう自分

が恥ずかしくてなりません」

と言つて、實際堪えられないだろうと思われるほど泣く。

「こちらへ上がりますと、またいつそうお気の毒になりました、魂も消えるようでございますと、先日典侍は陛下へ申し上げていらつしやいましたが、私のようなあさはかな人間でもほんとうに悲しさが身にしみます」

と言つてから、しばらくして命婦は帝の仰せを伝えた。

「当分夢ではないであろうかというようにばかり思われましたが、ようやく落ち着くとともに、どうしようもない悲しみを感じるようになりました。こんな時はどうすればよいのか、せめて話し合う人があればいいのですがそれありません。目だたぬようにして時々御所へ来られてはどうですか。若宮を長く見ずにいて気がかりでならないし、また若宮も悲しんでおられる人ばかりの中にいてかわいそうですから、彼を早く宮中へ入れることにして、あなたもいっしょにおいでなさい」

「こういうお言葉ですが、涙にむせ返つておいでになつて、しかも人に弱さを見せまいと御遠慮をなさらないでもない御様子がお気の毒で、ただおおよそだけを承つただけでまいりました」

と言つて、また帝のお言づてのほかの御消息を渡した。

「涙でこのごろは目も暗くなつておりますが、過分なかたじけない仰せを光明にいたしまして」

未亡人はお文を拝見するのであつた。

時がたてば少しは寂しさも紛れるであらうかと、そんなことを頼みにして日を送つていても、日がたてばたつほど悲しみの深くなるのは困つたことである。どうしているかとばかり思いやつている小児も、そろつた両親に育てられる幸福を失つたものであるから、子を失つたあなたに、せめてその子の代わりとして面倒を見てやつてくれることを頼む。

などこまごまと書いておありになつた。

宮城野の露吹き結ぶ風の音に小萩が上を思ひこそやれ

という御歌もあつたが、未亡人はわき出す涙が妨げて明らかには拝見することができなかつた。

「長生きをするからこうした悲しい目にもあうのだと、それが世間の人の前に私をきまり悪くさせることなのでございますから、まして御所へ時々上がることなどは思いもよらぬことでございます。もったいない仰せを伺っているのですが、私が伺候いたしますことは今後とも実行はできないでございましょう。若宮様は、やはり御父子の情というものが本能にありますものと見えて、御所へ早くおはいりになりたい御様子をお見せになりますから、私はごもつともだとおかわいそうに思っておりますということなどは、表向きの奏上でなしに何かのおついでに申し上げてくださいませ。良人も早く亡くしますし、娘も死なせてしまいましたような不幸づくめの私が御いっしょにおりますことは、若宮のために縁起のよろしくないことと恐れ入っております」

などと言った。そのうち若宮ももうお寝<sup>やす</sup>みになった。

「またお目ざめになりますのをお待ちして、若宮にお目にかかりまして、くわしく御様子も陛下へ御報告したいのでございますが、使いの私の帰りますのをお待ちかねでもいらっしゃいますでしょうか、それではあまりおそくなるでございましょう」

と言って命婦は帰りを急いだ。

「子をなくしました母親の心の、悲しい暗さがせめて一部分でも晴れますほどの話をさ

せていただきたいのですから、公のお使いでなく、気楽なお気持ちでお休みがてらまたお立ち寄りください。以前はうれしいことでよくお使いにおいでくださいましたのですが、こんな悲しい勅使であなたをお迎えするとは何ということでしょう。返す返す運命が私に長生きさせるのが苦しゅうございます。故人のことを申せば、生まれました時から親たちに輝かしい未来の望みを持たせました子で、父の大納言だいなじんはいよいよ危篤になりますまで、この人を宮中へ差し上げようと自分の思ったことをぜひ実現させてくれ、自分が死んだからといって今までの考えを捨てるようなことをしてはならないと、何度も何度も遺言いたしました、確かな後援者なしの宮仕えは、かえって娘を不幸にするようなものではないだろうかとも思いながら、私にいたしましたはただ遺言を守りたいばかりに陛下へ差し上げましたが、過分な御寵愛を受けまして、そのお光でみすばらしさも隠していただいて、娘はお仕えしていたのでしようが、皆さんの御嫉妬の積もっていくのが重荷になりまして、寿命で死んだとは思えませんような死に方をいたしましたのですから、陛下のあまりに深い御愛情がかえって恨めしいように、盲目的な母の愛から私は思いもいたします」

こんな話をまだ全部も言わないで未亡人は涙でむせ返ってしまったりしているうちに



ますます深更になった。

「それは陛下も仰せになります。自分の心でありながらあまりに穏やかでないほどの愛しようをしたのも前生ぜんしやうの約束で長くはいつしよにおられぬ二人であることを意識せずに感じていたのだ。自分らは恨めしい因縁でつながれていたのだ、自分は即位そくいしてから、だれのためにも苦痛を与えるようなことはしなかったという自信を持っていたが、あの人によって負ってならぬ女の恨みを負い、ついには何よりもたいせつなものを失って、悲しみにくくて以前よりもっと愚劣な者になっているのを思うと、自分らの前生の約束はどんなものであったか知りたいとお話しになって湿っぽい御様子ばかりをお見せになっています」

どちらも話すことにきりが無い。命婦みようぶは泣く泣く、

「もう非常に遅いおそようですから、復命は今晩のうちにいたしたいと存じますから」

と言って、帰る仕度したくをした。落ちぎわに近い月夜の空が澄み切った中を涼しい風が吹き、人の悲しみを促すような虫の声がするのであるから帰りにくい。

鈴虫の声の限りを尽くしても長き夜飽かず降る涙かな

車に乘ろうとして命婦はこんな歌を口ずさんだ。

「いとどしく虫の音<sup>ね</sup>しげき浅茅<sup>あさぢふ</sup>生に露置き添ふる雲の上<sup>うへ</sup>人<sup>ひと</sup>

かえって御訪問が恨めしいと申し上げたいほです」

と未亡人は女房に言わせた。意匠を凝らせた贈り物などする場合でなかったから、故人の形見ということにして、唐衣<sup>からぎぬ</sup>と裳<sup>も</sup>の一揃<sup>ひとそろ</sup>えに、髪上げの用具のはいった箱を添えて贈った。

若い女房たちの更衣の死を悲しむのはむろんであるが、宮中住まいをしなければ、寂しく物足らず思われることが多く、お優しい帝<sup>みかど</sup>の御様子を思ったりして、若宮が早く御所へお帰りになるようにと促すのであるが、不幸な自分がいっしょに上がっていることも、また世間に批難の材料を与えるようなものであろうし、またそれかといって若宮とお別れしている苦痛にも堪<sup>た</sup>えきれない自信がないと未亡人は思うので、結局若宮の宮中入りは実行性に乏しかった。

御所へ帰った命婦は、まだ宵<sup>よい</sup>のままで御寢室へはいっておいでにならない帝を気の毒

に思った。中庭の秋の花の盛りなのを愛していらっしやるふうをあそばして凡庸でない女房四、五人をおそばに置いて話をしておいでになるのであった。このごろ始終帝の御覧になるものは、玄宗皇帝と楊貴妃の恋を題材にした白楽天の長恨歌を、亭子院が絵にあそばして、伊勢や貫之に歌をお詠ませになった巻き物で、そのほか日本文学でも、支那のでも、愛人に別れた人の悲しみが歌われたものばかりを帝はお読みにになった。帝は命婦にこまごまと大納言家の様子をお聞きになった。身にしむ思いを得て来たことを命婦は外へ声をはばかりながら申し上げた。未亡人の御返事を帝は御覧になる。

もったいなさをどう始末いたしてよろしゅうございますやら。こうした仰せを承りまして愚か者はただ悲しい悲しいとばかり思われるのでございます。

荒き風防ぎし蔭の枯れしより小萩が上ぞしづ心無き

というような、歌の価値の疑わしいようなものも書かれてあるが、悲しみのために落ち着かない心で詠んでいるのであるからと寛大に御覧になった。帝はある程度まではおさえたいねばならぬ悲しみであると思召すが、それが御困難であるらしい。はじめて桐

壺つぼの更衣こういの上がつて来たころのことなどまでがお心の表面に浮かび上がってきてはいっ  
そう暗い悲しみに帝をお誘いした。その当時しばらく別れているということさえも自分  
にはつらかったのに、こうして一人でも生きていられるものであると思うと自分は偽り  
者のような気がすると帝は思いになった。

「死んだ大納言の遺言を苦勞して実行した未亡人への酬むくいは、更衣を後宮の一段高い位  
置にすることだ、そうしたいと自分はいつも思っていたが、何もかも皆夢になった」  
とお言いになって、未亡人に限りない同情をしておいでになった。

「しかし、あの人はいなくても若宮が天子にでもなる日が来れば、故人に后きさきの位を贈る  
こともできる。それまで生きていたいとあの夫人は思っているだろう」

などという仰せがあつた。命婦みょうぶは贈られた物を御前おまえへ並べた。これが唐からの幻術師が他  
界の楊貴妃ようきひに逢あつて得て来た玉の簪かんざしであつたらと、帝はかないこともお思いになつ  
た。

尋ね行くまぼろしもがなつてにても魂たまのありかをそこと知るべく

絵で見る楊貴妃はどんなに名手の描いたものでも、絵における表現は限りがあつて、それほどのすぐれた顔も持つていない。太液たいえきの池の蓮花れんげにも、未央宮びおうきゆうの柳の趣にもその人は似ていたであらうが、また唐からの服装は華美ではあつたであらうが、更衣の持った柔らかい美、艶えんな姿態をそれに思い比べて御覧になると、これは花の色にも鳥の声にもたとえられぬ最上のものであつた。お二人の間はいつも、天に在あつては比翼の鳥、地に生まれれば連理の枝という言葉で永久の愛を誓つておいでになつたが、運命はその一人に早く死を与えてしまった。秋風の音ねにも虫の声にも帝が悲しみを覚えておいでになる時、弘徽殿こきでんの女御にょごはもう久しく夜の御殿おとどの宿直とのいにもお上がりせずにて、今夜の月明に更ふけるまでその御殿で音楽の合奏をさせているのを帝は不愉快に思召した。このころの帝のお心持ちをよく知っている殿上役人や帝付きの女房なども皆弘徽殿の楽音に反感を持った。負けぎらいな性質の人で更衣の死などは眼中にないというふうをわざと見せていたのであつた。

月も落ちてしまった。

雲の上も涙にくるる秋の月いかですむらん浅茅生あさぢふの宿

命婦が御報告した故人の家のことをなお帝は想像あそばしながら起きておいでになった。

右近衛府の士官が宿直者の名を披露するのをもつてすれば午前二時になったのである。人目をおはばかりになつて御寢室へおはいりになつてからも安眠を得たもうことはできなかった。

朝のお目ざめにもまた、夜明けも知らずに語り合つた昔の御追憶がお心を占めて、寵姫の在つた日も亡いのちも朝の政務はお怠りになることになる。お食欲もない。簡単な御朝食はしるだけお取りになるが、帝王の御朝餐として用意される大床子のお料理などは召し上がらないものになつていた。それには殿上役人のお給仕がつくのであるが、それらの人は皆この状態を歎いていた。すべて側近する人は男女の別なしに困つたことであると歎いた。よくよく深い前生の御縁で、その当時は世の批難も後宮の恨みの声もお耳には留まらず、その人に関することだけは正しい判断を失つておしまいになり、また死んだあとではこうして悲しみに沈んでおいでになつて政務も何もお顧みにならないう、国家のためによろしくないことであるといつて、支那の歴朝の例までも引き出して言う人もあつた。

幾月かののちに第二の皇子が宮中へおはいりになった。ごく小さい時ですらこの世のものとはお見えにならぬ御美貌の備わった方であつたが、今はまたいつそう輝くほどのものに見えた。その翌年立太子のことがあつた。帝の思召おぼしめしは第二の皇子にあつたが、だれという後見の人がなく、まただれもが肯定しないことであるのを悟つておいでになつて、かえつてその地位は若宮の前途を危険にするものであると思ひになつて、御心中をだれにもお洩もらしにならなかつた。東宮におなりになつたのは第一親王である。この結果を見て、あれほどの御愛子でもやはり太子にはおできにならないのだと世間も言い、弘徽殿こうきでんの女御にょごも安心した。その時から宮の外祖母の未亡人は落胆して更衣のいる世界へ行くことのほかには希望もないと言つて一心に御仏みほとけの来迎らいじやうを求めて、とうとう亡なくなった。帝はまた若宮が祖母を失われたこととお悲しみになつた。これは皇子が六歳の時のことであるから、今度は母の更衣の死に逢あつた時とは違い、皇子は祖母の死を知つてお悲しみになつた。今まで始終お世話を申していた宮とお別れするのが悲しいということばかりを未亡人は言つて死んだ。

それから若宮はもう宮中にばかりおいでになることになつた。七歳の時に書初ふみはじめの式が行なわれて学問をお始めになつたが、皇子の類そふめいのない聡明さに帝はお驚きになること

が多かった。

「もうこの子をだれも憎むことができないでしょう。母親のないという点だけでかわいがっておやりなさい」

と帝はお言いになつて、弘徽殿へ昼間おいでになる時もいっしょにおつれになつたりしてそのまま御簾みすの中にまでもお入れになつた。どんな強さ一方の武士だつても仇敵きゆうてきだつてもこの人を見ては笑みえが自然にわくであらうと思われる美しい少童しょうどうでおありになつたから、女御も愛を覚えずにはいられなかつた。この女御は東宮のほかに姫宮をお二人お生みしていたが、その方々よりも第二の皇子のほうがおきれいであつた。姫宮がたもお隠れにならないで賢い遊び相手としてお扱いになつた。学問はもとより音楽の才も豊かであつた。言えば不自然に聞こえるほどの天才児であつた。

その時分に高麗人こまうどが来朝した中に、上手な人相見じやうみの者が混じつていた。帝はそれをお聞きになつたが、宮中へお呼びになることは亭子院のお誠めいましがあつておできにならず、だれにも秘密にして皇子のお世話役のうになつてゐる右大弁うだいべんの子のように思わせて、皇子を外人の旅宿する鴻臚館こうろかんへおやりになつた。

相人は不審ふしんそうに頭こゝろをたびたび傾けた。



「国の親になつて最上の位を得る人相であつて、さてそれでよいかと拝見すると、そうなることはこの人の幸福な道でない。国家の柱石になつて帝王の輔佐をする人として見てもまた違うようです」

と言つた。弁も漢学のよくできる官人であつたから、筆紙をもつてする高麗人との問答にはおもしろいものがあつた。詩の贈答もして高麗人はもう日本の旅が終わろうとする期に臨んで珍しい高貴の相を持つ人に逢つたことは、今さらにこの国を離れがたくすることであるというような意味の作をした。若宮も送別の意味を詩にお作りになつたが、その詩を非常にほめていろいろその国の贈り物をしたりした。

朝廷からも高麗の相人へ多くの下賜品があつた。その評判から東宮の外戚の右大臣などは第二の皇子と高麗の相人との關係に疑いを持った。好遇された点が腑に落ちないのである。聡明な帝は高麗人の言葉以前に皇子の将来を見通して、幸福な道を選ぶとしておいでになつた。それでほとんど同じことを占つた相人に価値をお認めになつたのである。四品以下の無品親王などで、心細い皇族としてこの子を置きたくない、自分の代もいつ終わるかしのぬのであるから、将来に最も頼もしい位置をこの子に設けて置いてやらねばならぬ、臣下の列に入れて国家の柱石たらしめることがいちばんよいと、こう

お決めになって、以前にもましていろいろの勉強をおさせになった。大きな天才らしい点の現われてくるのを御覧になると人臣にするのが惜しいというお心になるのであったが、親王にすれば天子に変わろうとする野心を持つような疑いを当然受けそうにお思われになった。上手な運命占いをする者にお尋ねになっても同じような答申をするので、元服後は源姓を賜わつて源氏の某なにかしとしようとお決めになった。

年月がたつても帝は桐壺の更衣との死別の悲しみをお忘れになることができなかった。慰みになるかと思召して美しい評判のある人などを後宮へ召されることもあったが、結果はこの世界には故更衣の美に準ずるだけの人もないのであるという失望をお味わいになっただけである。そうしたころ、先帝みかど——帝の從兄いとこあるいは叔父君おじぎみ——の第四の内親王でお美しいことをだれも言う方で、母君のお后きさきが大事にしておいでになる方のことを、帝のおそばに奉仕している典侍なishのすけは先帝の宮廷にいた人で、後の宮へも親しく出入りしていて、内親王の御幼少時代をも知り、現在でもほのかにお顔を拝見する機会を多く得ていたから、帝へお話した。

「お亡かくれになりました御息所みやすどころの御容貌ようぼうに似た方を、三代も宮廷におりました私すらまだ見たことがございませんでしたのに、後の宮様の内親王様だけがあの方に似ていらつ

しやいますことにはじめて気がつきました。非常にお美しい方でございます」

もしそんなことがあつたらと大御心おおみこころが動いて、先帝の後の宮へ姫宮の御入内ごじゅだいのことを懇切にお申し入れになった。お后は、そんな恐ろしいこと、東宮のお母様の女御にょぎが並みはずれな強い性格で、桐壺の更衣こういが露骨ないじめ方をされた例もあるのに、と思召して話はそのままになっていた。そのうちお后もお崩れかくになった。姫宮がお一人で暮らしておいでになるのを帝はお聞きになって、

「女御というよりも自分の娘たちの内親王と同じように思つて世話がしたい」

となおも熱心に入内をお勧めになった。こうしておいでになって、母宮のことばかりを思つておいでになるよりは、宮中の御生活にお歸りになつたら若いお心の慰みにもなろうと、お付きの女房やお世話係の者が言い、兄君の兵部卿親王ひょうぶきょうしんもその説に御賛成になつて、それで先帝の第四の内親王は当帝の女御におなりになった。御殿は藤壺ふじつばである。典侍の話のとおりに、姫宮の容貌も身のおとりなしも不思議なまで、桐壺の更衣に似ておいでになった。この方は御身分に批ひの打ち所がない。すべてごりつぱなものであつて、だれも貶める言葉おとしを知らなかった。桐壺の更衣は身分と御愛寵いとくとに比例の取れぬところがあつた。お傷手いたでが新女御の宮で癒いされたともいえないであろうが、自然に昔

は昔として忘れられていくようになり、帝にまた楽しい御生活がかえってきた。あれほどのこともやはり永久不変でありえない人間の恋であつたのであろう。

源氏の君——まだ源姓にはなつておられない皇子であるが、やがてそうおなりになる方であるから筆者はこう書く。——はいつも帝のおそばをお離れしないのであるから、自然どの女御の御殿へも従つて行く。帝がことにしばしばおいでになる御殿は藤壺ふじつぼであつて、お供して源氏のしばしば行く御殿は藤壺である。宮もお馴なれになつて隠れてばかりはおいではならなかつた。どの後宮でも容貌の自信がなくて入内した者はないのであるから、皆それぞれの美を備えた人たちであつたが、もう皆だ**い**ぶ年が**い**つていた。その中へ若いお美しい藤壺の宮が出現されてその方は非常に恥ずかしがつてなるべく顔を見せぬようになすつても、自然に源氏の君が見ることになる場合もあつた。母の更衣は面影も覚えていないが、よく似ておいでになると典侍が言つたので、子供心に母に似た人として恋しく、いつも藤壺へ行きたくなつて、あの方と親しくなりたいという望みが心にあつた。帝には二人とも最愛の妃であり、最愛の御子であつた。

「彼を愛しておやりなさい。不思議なほどあなたとこの子の母とは似ているのです。失礼だと思わずにかわいがつてやつてください。この子の目つき顔つきがまたよく母に似

ていますから、この子とあなたとを母と子と見てもよい気がします」

など帝がおとりなしになると、子供心にも花や紅葉もみじの美しい枝は、まずこの宮へ差し上げたい、自分の好意を受けていたきたいというこんな態度をとるようになった。現在しつとの弘徽殿の女御の嫉妬しつとの対象は藤壺の宮であつたからそちらへ好意を寄せる源氏に、一時忘れられていた旧怨も再燃して憎しみを持つことになった。女御が自慢にし、ほめられてもおおいでになる幼内親王方の美を遠くこえた源氏の美貌びぼうを世間の人は言い現わすために光ひかるの君きみと言つた。女御として藤壺の宮の御寵愛ちようあいが並びないのであつたから対句のように作つて、輝く日の宮と一方を申し立てた。

源氏の君の美しい童形どうぎやうをいつまでも変えたくないように帝は思召したのであつたが、いよいよ十二の歳としに元服をおさせになることになった。その式の準備も何も帝御自身でお指図さしずになった。前に東宮の御元服の式を紫宸殿ししんでんであげられた時の派手はでやかさに落とさず、その日官人たちが各階級別々にさずかる饗宴きやうえんの仕度したくを内蔵寮くらりよう、穀倉院などではつまり公式の仕度で、それでは十分でないと思召して、特に仰せがあつて、それらも華麗をきわめたものにされた。

清涼殿は東面しているが、お庭の前のお座敷に玉座の椅子いすがすえられ、元服される皇

子の席、加冠役の大臣の席がそのお前にできていた。午後四時に源氏の君が参った。上で二つに分けて耳の所で輪にした童形の礼髪を結った源氏の顔つき、少年の美、これを永久に保存しておくことが不可能なのであるうかと惜しまれた。理髪おのりかみの役は大蔵卿である。美しい髪を短く切るのを惜しく思うふうであった。帝は御息所みやすどころがこの式を見たならばと、昔をお思い出しになることによつて堪えがたくなる悲しみをおさえておいでになった。加冠が終わつて、いったん休息所きふつぐしよに下がり、そこで源氏は服を変えて庭上の拝をした。参列の諸員は皆小さい大宮人の美に感激の涙をこぼしていた。帝はまして御自制なされがたい御感情があつた。藤壺の宮をお得になつて以来、紛れておいでになることもあつた昔の哀愁が今一度にお胸へかえつて来たのである。まだ小さくて大人おとなの頭の形になることは、その人の美を損じさせはしないかという御懸念もおありになつたのであるが、源氏の君には今驚かれるほどの新彩が加わつて見えた。加冠の大臣には夫人の内親王との間に生まれた令嬢があつた。東宮から後宮にとお望みになつたのをお受けせずにお返辞へんじを躊躇ちゅうちよしていたのは、初めから源氏の君の配偶者に擬していたからである。大臣は帝の御意向をも伺つた。

「それでは元服したのちの彼を世話する人もいることであるから、その人をいっしょに

させればよい」

という仰せであつたから、大臣はその実現を期していた。

今日の侍所きやくしよになつてゐる座敷で開かれた酒宴に、親王方の次の席へ源氏は着いた。娘の件を大臣がほめかしても、きわめて若い源氏は何とも返辞をすることができないのであつた。帝のお居間のほうから仰せによつて内侍ないしが大臣を呼びに来たので、大臣はすぐに御前へ行つた。加冠役としての下賜品はおそばの命婦が取り次いだ。白い大桂おおうちぎに帝のお召し料のお服ひとかさねが一襲で、これは昔から定まつた品である。酒杯を賜わる時に、次の歌を仰せられた。

いときなき初元結ひに長き世を契る心は結びこめつや

大臣むすめの女との結婚にまでお言い及ぼしになつた御製は大臣を驚かした。

結びつる心も深き元結ひに濃き紫の色しあせずば

と返歌を奏上してから大臣は、清涼殿せいりやうでんの正面の階段きざはしを下がつて拝礼をした。左馬寮さまりやうの御馬ごうまと蔵人所くらにんじよの鷹たかをその時に賜たまわつた。そのあとで諸員が階前きざのまえに出て、官等に従つてそれぞれの下賜品を得た。この日の御饗宴ぎやうえんの席の折り詰めのお料理、籠詰かごづめめの菓子などは皆右大弁うだいべんが御命令によつて作つた物であつた。一般の官吏に賜う弁当の数、一般に下賜される絹を入れた箱の多かつたことは、東宮の御元服の時以上であつた。

その夜源氏の君は左大臣家へ婿になつて行つた。この儀式にも善美は尽くされたのである。高貴な美少年の婿を大臣はかわいく思つた。姫君のほうが少し年上であつたから、年下の少年に配されたことを、不似合いに恥はづかずかしいことに思つていた。この大臣は大きい勢力を持つた上に、姫君の母の夫人は帝の御同胞であつたから、あくまでもはなやかな家である所へ、今度また帝の御愛子の源氏を婿に迎えたのであるから、東宮の外祖父で未来の関白と思われている右大臣の勢力は比較にならぬほど氣押けおされていた。左大臣は何人かの妻妾さいしやうから生まれた子供を幾人も持つていた。内親王腹のは今蔵人少将であつて年少の美しい貴公子であるのを左右大臣の仲はよくないのであるが、その蔵人少将をよその者に見ていることができず、大事にしている四女の婿にした。これも左大臣が源氏の君をたいせつがるのに劣らず右大臣から大事な婿君としてかしくされていた



のはよい一対のうるわしいことであつた。

源氏の君は帝がおそばを離しにくくあそばすので、ゆつくりと妻の家に行つてゐることもできなかった。源氏の心には藤壺ふじつぼの宮の美が最上のものに思われてあのような人をも自分も妻にしたい、宮のような女性はもう一人とないであろう、左大臣の令嬢は大事にされて育つた美しい貴族の娘とだけはうなずかれるがと、こんなふうに思われて単純な少年の心には藤壺の宮のことばかりが恋しくて苦しいほどであつた。元服後の源氏はもう藤壺の御殿みすの御簾すの中へは入れていただけになかつた。琴や笛ねの音の中にその方がお弾ひきになる物の声を求めるとか、今はもう物越ものこしにより聞かれないほのかなお声を聞くとかが、せめてもの慰めになつて宮中の宿直とくいばかりが好きだつた。五、六日御所みよにいて、二、三日大臣家へ行くなど絶え絶えの通い方を、まだ少年期であるからと見て大臣はとがめようとも思わず、相も変わらず婿君のかしずき騒さわぎをしていた。新夫婦付きの女房はことにすぐれた者をもつてしたり、氣に入りそうな遊びを催もよほしたり、一所懸命である。御所では母の更衣みのもともとの桐壺を源氏の宿直所にお与みえになつて、御息所みよすに侍まじつていた女房をそのまま使つかわせておいでになつた。更衣の家うちのほうは修理しゆりの役所、内匠寮たくみりょうなどへ帝がお命みことじになつて、非常なりつぱなものに改築されたのである。もともとから築山つきやまの

あるよい庭のついた家であったが、池なども今度はずっと広くされた。二条の院はこれである。源氏はこんな氣に入つた家に自分の理想どおりの妻と暮らすことができたらしら思つて始終歎息たんそくをしていた。

光ひかるの君という名は前に鴻臚館こうろかんへ来た高麗人こまうどが、源氏の美貌びぼうと天才をほめてつけた名だとそのころ言われたそうである。

## 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡いただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---